

## ひな祭り行事の再構築と女性の手芸活動：柳川さげもん調査予報

坂元，一光

九州大学大学院人間環境学研究院国際教育環境学講座：教授：教育人類学

アナトラ，グリジャナティ

九州大学大学院人間環境学研究院：学術協力研究員：教育人類学

<https://doi.org/10.15017/20029>

---

出版情報：大学院教育学研究紀要．13，pp.61-75，2011-03-25．九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門

バージョン：

権利関係：

# ひな祭り行事の再構築と女性の手工芸活動

— 柳川さげもん調査予報 —

坂 元 一 光     アナトラ・グリジャンティ

## はじめに

小論は福岡県柳川市のひな祭り行事とそれに伴う手芸知識・技術の伝承過程を明らかにするための予備的報告である<sup>(1)</sup>。その一環として、今回は地元女性による行事活動（ひな飾り）や手芸活動（さげもん作り）の実態およびそれらの活動が展開する社会的、文化的文脈について報告する。初節句家庭でのさげもん飾りや婦人会、シルバー人材センター等でのさげもん作製や技術習得の場面を紹介しながら、行事の伝承過程を支え動かしている地元女性たちの行事や手芸実践の実態とそれをとりまくマクロ、ミクロな文脈についての大まかな見取り図を描くことをめざす<sup>(2)</sup>。

柳川における「さげもん細工」の吊るし飾りは、当地の女兒の初節句行事に華やかな彩りと独自性を与えてきた。柳川のひな祭りは常にさげもん細工との強い結び付きにおいて語られる。市販のひな人形飾りにさげもんが添えられることで当地の行事には地域的固有性と手作り感が加わる。一方、近年観光化にともなう行事の再構築過程のなかでひな祭りとさげもん細工は様々に再定義されるようになってきている。両者は依然として密接な結び付きを保ちつつも、その間には新しい関係性が生み出されている。それは例えばさげもんが本来の生活習俗の文脈から切り離され、観光客用の土産品や趣味活動の対象、生涯学習の教材などその用途を拡大していく実態のなかに見いだされる。またさげもんが土産品や地元の初節句家庭向けに商品化していくなかで、それは女性たちの副業の手段としても作られるようになってきている。さらにひな祭りのイベント化は初節句でもなく若い女兒もいない家庭の女性たちが自宅のさげもん飾りを外部に披露する楽しみや機会を提供している。中高年女性を中心に構成されるさげもん作りの場は子育てや職業生活を終えた女性たちの第二の人生（アイデンティティ）の再構築の場でもあるのだ。ひな祭り行事をめぐる女性たちのこうした諸活動は、地域の人やモノ、文化的仕組みとの関係において組織化されるひとつの「実践共同体」（レイヴ/ウェンガー1993）<sup>(3)</sup>としてあり、また同時に伝統的な手芸知識・技術の伝承の文脈を形づくっていると考えられる。

## 1. 柳川のひな祭りと「さげもん」細工の現状

福岡県柳川市のひな祭りでは一般的なひな人形とともに華麗な「まり（毬）」と手芸小物「ちり

めん（縮緬）細工」からなる「さげもん」と呼ばれる吊るし飾りが添えられる（写真1）。さげもんは女兒の母親や祖母，近隣や親戚の女性たちが子どもの無事な成長と幸せを祈りつつ手作り準備し祝いの品としてきた。柳川のさげもんはまりと縮緬細工から構成されるつるし飾りである。

まりは地元の伝統工芸である「柳川まり」を基本としている。一方，ちりめん細工は縁起物の動植物や人形をかたどった手芸小物である。この初節句の習俗は現代にも引き継がれ手芸や裁縫に心得のある地元の女性たちは今も手作りのさげもんを作っている。柳川のひな祭り行事を特徴づけ支えているのは，こうした伝統手工芸品とその製作（手工芸）活動と言っても過言ではない。

さげもんは柳川に古くから伝わるひとつの民俗工芸であり日本女性の手芸文化のなかに位置づけられる。その歴史は江戸期の富裕層の女性によって作られていた「裁縫お細工物」<sup>(4)</sup>と呼ばれる手芸品（ちりめん細工）に由来するといわれている（井上 2004，2008 尾崎 2008）。これらの裁縫お細工物とはとくに戦後，衣服や生活様式の変化によってすたれていくが，ちりめん細工の復興・普及活動がすすめられるなかで，現在では各地のカルチャーセンターや趣味講座などを中心にふたたび女性たちの注目と関心を集めつつある。

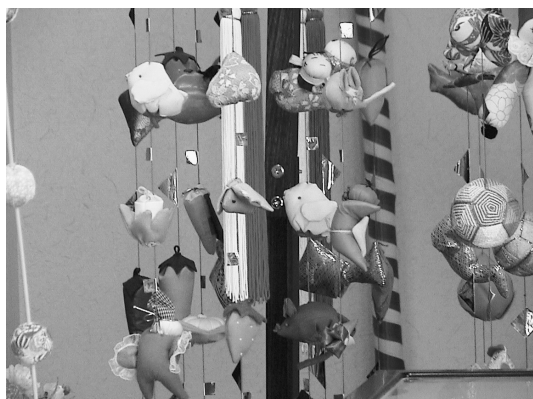
産育儀礼としての性格も合わせ持つひな祭りのさげもんには女兒の産育をめぐる親たちのさまざまな期待や観念が込められている。さげもん輪に吊り下げられた49種の動植物や人形の手芸品には，そうした願いや期待がシンボリックに表象されている<sup>(5)</sup>。初節句を迎えた家庭には，ひな人形の壇飾りの左右に縁起物の動植物や人形等のさげもんが円くすだれ状に吊り下げられ，祝いの空間に華やかな彩りを添える。

### 初節句家庭とさげもん飾り<sup>(6)</sup>

まず柳川のひな祭り（初節句）の具体的な様子から見ていくことにしよう。取り上げるのは2010年春に初節句を迎えた一軒の家庭である。

Kさん宅では52年ぶりの初節句を行なった。昨年（2009年）12月に生まれた（自分の長男の）長女の初節句である。Kさん夫婦には娘はおらず，K家では夫の妹の初節句の時以来，ずっと雛壇やさげもんを飾る機会がなかった。そのためいちだんと華やいだ初節句になった。Kさん宅の初節句は観光客向けには開放されておらず（後述），従来どおりの家庭行事として行われていた。それでもひな人形やさげもんで居間を飾り付けて隣近所の知り合いなども気安く招き入れている。じつはKさんはさげもんを作った経験がない。今回は孫のために自分で作ってやれなかったが，退職後はさげもん作りを始めたいと考えている。自分で作れない人は前もってまりやさげもん作りのうまい女性に注文して作ってもらったり，あるいは関連の販売店に予約を入れたりして準備をしておく。Kさんは毎年でも気楽に飾れるように雛壇を三段飾りにしているが，それでもさげもんやまりは数多く飾られていた（写真2）。

またKさんによれば，近年，初節句を迎えた家庭では，昔に比べ立派な飾りをするとところが増えてきた。それにつれて（とくに嫁の実家にとっては）経済的負担も大きくなってきている。市販のさげもんの場合，左右一対が3万円～12万円以上ほどで，「まり」1つとっても3000円から数万円



写真(1) さげもん細工



写真(2) Kさん宅のさげもん飾り

までさまざまである。今は、子どもが減っているので、子どもの行事に手間暇かける人が増えている。誰も他人が見ても恥ずかしくない雛壇やさげもんを飾りたいと考えるため、ひと昔まえに比べ自然にお金がかかってくると近年のさげもんやひな祭りの様子を語った。

また初節句行事のやり方に関しても身近な変化が指摘された。柳川では他地域から婚入してくる女性が増えていくなか初節句のやり方も変化している。本来、さげもんは嫁側の実家が準備し、嫁ぎ先の夫の実家に贈られそこで飾られる習慣だったが、近年は他所の地域から婚入してくる女性が増加しているため、さげもんは嫁ぎ先（柳川の夫方）で準備することも多くなっている。他の地域から婚入してくる女性が増え、昔ながらのやり方も難しくなっているようである。

さらに、Tさんは次のような友人の話を紹介した。柳川から他の地域に出ていった人の場合も昔ながらの行事のやり方は難しい。友人は他出した息子に長女が生まれた時、さげもんを贈ったが、他県出身の母親が習慣の意味や飾り方が分からず、友人が息子宅を訪れたときおかしな飾り方をしたさげもんを見て落胆させられた。就職などで柳川から他の地域に出ていく若者が増え、初節句をしない世代も増えている。これに対して地元の多くの祖父母たちは孫が他の地域で生まれ生活していても初節句は柳川のやり方で祝いたいと考えているという。

## 2. 「ひな祭り」の再構築

地域の固有の行事や民俗を観光のための資源として活用しようとする流れは、今日の日本では全国的に見られる現象である（川森 2001, 岩本 2007）。さげもん及びこれを中心とするひな祭りに関しても同じことがいえる。柳川のひな祭りはその観光資源化の取り組みによって他者の眼差しに供する目的のもと脱・家庭行事化や脱・地域行事化のプロセスを経て再構築されている。

### (1) 脱・家庭行事化

ひな祭り行事は子どもの産育儀礼としての性格を持ち、各家庭の私的空間を中心におこなわれてきた。上で紹介したKさん宅の初節句もその例である。しかし、近年、柳川では私的行事としておこなわれていたひな祭りが、観光化の文脈のなかで、地域や観光客を巻き込んだ地域行事（イベント）的側面を持つようになってきている（「観光ひな祭り」）。いわばひな祭りの「脱・家庭行事化」の現象である。

以下に紹介するのは観光協会が企画している「さげもんめぐり」の観光コースに組み込まれた初節句家庭の様子である。観光コースに組み込まれているとはいっても、実際に子どもの初節句を祝っている家庭であり、私的な行事を基本としている<sup>(7)</sup>。しかし観光コースに組み入れられることによって居間の飾りのしつらえや来訪者への茶菓、土産物（菓子）などより大がかりな準備が見られ、外部・地域に対するより積極的な開放性を見出すことができる。

#### 観光ツアーの初節句家庭<sup>(8)</sup>

Tさん宅の今年の初節句は1歳2ヵ月の初孫（次男の長女）のための祝いである。Tさん宅は観光協会の「さげもんめぐりツアー」に協力しておりそのコースに組み込まれている。玄関には初節句の家庭が分かるようにピンクのぼり旗が目印として立てられている。またTさん宅はNHKの地方ニュースでも紹介されたため、地域外からも観光客が数多く訪れていた。訪問のたび、いつも大勢の訪問客があった。訪問客には観光客だけでなく、さげもん飾りを観賞にきている地域の人もいれば、手作りのまりをもって赤ん坊の初節句祝いにきている知人もいた。

Tさん宅では息子の嫁が柳川出身ではなかったため、雛壇からさげもんまで自分たち（柳川の祖父母）が準備をしたという。雛壇は7段飾りを準備し、さげもんは親戚や近所から祝い品として贈られたものもあれば、20数年前に長女の初節句で飾ったさげもんもある。また、親戚や友人に娘あるいは孫が生まれた時に贈りものとして持っていったさげもんで、今度自分のところに戻ってきたものもあった。Tさんはそれまでさげもんを作った経験がなかったが、今回始めて孫のために見よう見まねで作った。

Tさんによれば、赤ん坊と一緒に生活しているわけではないが、われわれ祖父母は人形やさげもんを飾ることで県外で暮らす赤ん坊が健康で幸せに成長していくこと祈っている。昔からひな飾りを沢山の人に見てきてもらうことによって孫の健康と成長つながると信じられているからだ。

### (2) 脱・地域行事化 ― 民俗のネットワーク化 ―

柳川のひな祭りでは九州各地のひな祭り行事とのネットワーク化（行事を介した地域間連携）や「つるし飾り」習俗にもとづく全国的なネットワーク化など地域を超えた連携が見られる。そしてそれらはひな祭りの再構築の一環でもある。

まず九州圏内のネットワーク化であるが、九州各地ではそれぞれ独自の歴史的、民俗の特徴が強調される一方で、これらの行事を九州全体の季節イベントという共通の枠組で結び付け、相乗効果



によって相互の資源的価値を高めようとする取り組みがなされている。例えば、九州各地のひな祭り行事を一冊のガイドブックにまとめて紹介するなどして、地域ごとの固有性や魅力を一層きわだたせようとしている<sup>(9)</sup>。

また柳川の場合には、全国的なネットワーク化の取り組みもある。柳川のさげもんの「つるし飾り」としての特徴を利用して全国の類似の習俗や行事との関係構築も進めている。ちりめん細工をつるす飾り物の類似習俗は、柳川以外に静岡県伊豆稲取と山形県酒田市の二ヶ所ほどに存在している。いずれも祭礼や行事のなかに組み込まれており「つるし飾り」の総称をもつ。柳川の観光ひな祭りはこのつるし飾りの特徴に基づいて全国的な観光事業ネットワークも構築している。こうした連携の取り組みは「日本三大つるし飾りサミット」の名称で観光に付帯する交流事業のかたちで具体的に推進されており、そこでは観光事業や行政関係者らが各地のつるし飾りの来歴や観光事業の現況などについて意見交換をおこなっている<sup>(10)</sup>。

### 3. さげもん（作り）の再定義

もともとさげもんはハレの日の贈答用、飾り付け用の民具として母親や祖母（あるいは親しい知人や親戚の女性たち）によって手作り準備されてきた。こうしたさげもんの基本的な製作過程や用途は今も受け継がれており、その手作りの祝い品・贈答品としての側面も保たれている。しかし、柳川ではひな祭りの再構築と連動して、さげもん自体の再定義もみられる。すなわちさげもんの生活用品としての用途が、土産用、趣味用、教材用あるいは工芸作品などと多岐に広がっているのである。さげもんが習俗の文脈から切り離されることで、さげもん自体にさまざまな再定義の余地が生まれたといえる。

まずいわゆる「生活さげもん」が行事の観光化や外部者のまなざしの中で、生活習俗の文脈から切り離され、観光客の旅の思い出の品や部屋を飾るインテリアとしての用途をもつようになった。すなわち「観光さげもん」の誕生である。また柳川では地域の各種団体や文化サークルを中心に趣味や生涯学習の一環として行われるさげもん作りも盛んである。そこでのさげもん製作は基本的に趣味活動の一環として行われている。近年の女性のライフスタイル変化や都市化によって彼女たちの趣味活動は豊かになっている。柳川のさげもん作りも地域的、習俗的文脈を離れ、女性の趣味活動の新しいジャンルを形成しつつある。柳川のさげもんには女性の個人的趣味活動のための「趣味のさげもん（作り）」としての側面も見出すことができる。さらにさげもんの再定義を受けてその販売や受注製作を目的とした副業さげもん作りあるいは商品さげもんの登場がある。副業としてのさげもん作りは家庭において個人的に行われている。販売につながるさげもん作りは後述する婦人会やシルバー人材センターの手芸サークルでも行われている。しかし、それらの売り上げは個人の収入や活動資金になったりもするが、そこでのさげもん作りは、まずもって、地域に生活する中高年女性のエンパワーや自己実現を目的とする生涯学習や趣味の教材として位置づけられている（「教材さげもん」）。婦人会では頻繁にさげもんの講習会や集まりの機会を持ちながら参加者の交流

や技術向上、会員ネットワーク維持に結び付けている。シルバー人材センターにおいても定期的に講習会を開いて裁縫技術の相互学習や情報交換をおこない相互の親睦と健康福祉の向上につとめている。

#### 4. さげもん知識・技術の継承

サークルの女性たちはその多様な用途や目的を判然と区別しながらさげもんの作りを行っているわけではない。「趣味と実用」あるいは「趣味と実益」をかねたさげもん作りが現実の姿である。例えば婦人会やシルバー人材センターのさげもん作りも多様な用途や目的を含んでいる。またそこではさげもん作りだけをおこなっているわけではなく、その重要な活動のひとつとしてさげもん以外の手芸品作りもおこなっている。しかしここでの集団的な手芸活動が柳川におけるさげもん知識・技能の習得の場になっている点は留意すべきであろう。再定義され多様化したさげもん（作り）の用途や目的とそれにとまなう集団的な手芸活動の場の展開は、女性たちのさげもん作りへの参加の機会と意欲を拡大し、結果として地域の手芸知識・技術を持続可能なものになっている。

一般に伝統社会の手芸知識・技術は母から娘へという家庭内家族関係をとおして継承されていた。しかし今ではそのような継承形態は過去のものとなり、母親世代だけでなく祖母世代においても家庭内での手芸知識・技術習得の経験を持たない者がほとんどである。にもかかわらず柳川でさげもんの伝統手芸の知識・技術が行事と密接に連動しつつ今に存続しているのは、かつての家庭内継承をおぎなう知識・技術習得の場が存在することによる。この点において地元婦人会をはじめ地域に広く張り巡らされた手芸活動の多様な場が、家庭内継承をおぎなうかたちで、地域全体として地元女性たちに知識・技術の習得や伝承の機会を提供しているといえる。そこは中高年女性の趣味活動を中心に組織化された「実践共同体」であると同時に、地域の伝統手芸の知識・技術の習得・継承を担う伝承の場でもあるのだ。柳川の伝統手芸の知識・技術は地元女性の中高年期の趣味活動の場を中心に再生産されているのである。

##### (1) 婦人会のさげもんサークル<sup>(11)</sup>

訪問したのは市内にある8つの婦人会の内、規模が一番大きいS婦人会であり、会員数は約1000人程度。今年度（平成22年）の婦人会の手芸教室は5月に始まっており、月に二回（月曜日に）行っている。学校の夏休み期間を除いて12月まで半年間の活動である。この期間中に作られたさげもんが「さげもん展示即売会」で展示・即売されている。手芸教室に入っている会員には、さげもんを作った経験のない初心者の方もいれば、ベテランの方もいる。年齢的には、仕事や育児が終わって時間の余裕がある60代前半から70代後半の中高年女性で占められており、若い女性はいない。今回（5月24日）の手芸教室では14人が集まった。そのうち、さげもんを作った経験のある人は2人、他の12人は初心者であった。教えにきていた講師は、美容室を営み若い頃からさげもん作りになずさわってきた60代の女性（Mさん）であった。



写真(3) 当日の課題作品



写真(4) 婦人会手芸サークル

今回の手芸教室では、傘型の小ぶりなさげもん飾りの製作を目標にしていた。第一回目の教室の課題は、人形作りであった(写真3)。早めにやって来た参加者が手慣れた様子で公民館の長机を持ち出し12畳ほどの広間の部屋に口の字型に並べていく。時間になって参加者が集まり講師も到着する。特に自己紹介もなく材料を配りながら、材料費を集め、解説が始まる。講師は人数分の材料を準備し、その場で自分でも作業を進めながら、作り方を教えていく。講師が参加者たちの間を見て回ることもあるが、参加者たちが講師のところに質問に来ることもある。初心者も用意されてきた型紙をもとに人形の各部分の形を切り取り、糊付け、縫い、アイロンがけなど1つ1つの工程を手順にそってすすめていく(写真4)。作業中は技術的なことだけではなくさまざまな生活の話題、冗談が飛び交い和やかな雰囲気包まれる。やはり経験者の手際はよく先生と同時に人形を完成させた。しかし、初心者たちは予定されていた時間内(14:00~16:00)に完成できず、宿題として持ち帰っていた。終わり際に講師から、ここで作った人形をもう一度自宅で作ってみる、同じ作業を繰り返すことで作業に慣れ、上手に作れるようになる、などのアドバイスがあり教室は終わった。

参加者の中には、孫が生まれるから勉強し始めたという者もいれば、友人や知り合いの孫あるいは子どものお祝いに手作りの「さげもん」を贈りたいという目的で始めたという者もいた。また興味を持っている者同士が集まって気楽に勉強できることを楽しみに来ているという者もいた。参加者の年齢や話からは基本的に子育てや仕事が終わって自分の自由な時間が取れた頃合いを見計らったの参加が多い。年齢の差はあるものの、この場は彼女たちにとって生きがいの場となっている。経験者は、自らが持っている技術をさらに磨き、また新しい技術を身に付けることを楽しみにきている。一方、初心者は、焦ることもなければ、余計なプレッシャーも感じず自分のペースで作品作りに参加している。経験者は初心者の仲間が作品を作れるようサポートする。

このように婦人会の手芸教室は、手芸技術の習得によって地域文化を維持・伝承していく基盤となっているだけでなく、中高年女性の趣味生活を充実させる役割も果たしている。また、中高年女性の社会的ネットワークを広げ生活情報の交換ができる場を提供をしている。



## (2) シルバー人材センター手芸同好会<sup>(12)</sup>

柳川市シルバー人材センターでは、現在（2010年）約700人の会員があり、そのうち4割が女性会員である。センターでは「同好会」という名称で手芸教室が行われており、50人の会員が登録されている。今年度の手芸同好会は、5月に始まっており、ひと月に一度の頻度で行っている。婦人会と同じように、12月まで半年間の活動であり、この期間中に作られたさげもんが「さげもん展示即売会」で展示・即売される。また学校の夏休み期間中は、小学校4～6年生を対象に手芸体験学習を行っており、今年は干支のうさぎ作りが予定されている。

筆者らが訪問した日は、大雨のため参加者は少なかったが、それでも26人が集まった。その他、様子だけ見に来た人も一人いた。この日は、「まり」作りの最後の集まりであった（写真5）。5月から7月までの3回の学習計画は、「まり」作りになっており、みんなそれぞれ一年の目標（来年の展示・即売会）に向けた「まり」作りに取り組んでいた。普段は、同会の会員でベテランの参加者が教えている。今回は2人の講師が教えに来ていた。これは毎回のことではなく、特徴のある「まり」作りや新しいデザインに挑戦する時にだけ講師を招いている。

手芸同好会では、婦人会の手芸教室と違って材料は参加者がそれぞれ準備し持ってくる（写真6）。集めた会費（300円）は当日の学習が終わった後の茶話会の費用に充てている。同好会では会長とセンターの職員が一人付いて世話をしている。教室はセンターの二階にあり、明るく広い部屋が用意されている。参加人数が多いため、テーブルを口の字型に二列に並べ人数分の椅子を準備する。時間になると参加者はそれぞれ席に着き、材料を出し作業の準備をする。二人の講師は前の席に座り、特に参加者の間を見回ることなく、作る予定のまりを幾つかテーブルの上において自たちの作業を進める。当日、参加者の中に初心者はいなかったが、今年で二年目だという人も何人かいた。そうした経験の少ない参加者は講師に教えてもらったり、色選びのアドバイスなどを受けていた。参加者の中には経験者も多く、お互いに相談しながら作業を進めていた。

婦人会の手芸教室に比べ参加者の年齢は高く70代が多い。学習の様子も違っていた。写真（5）よ



写真 (5) シルバー人材センター手芸同好会



写真 (6) 材料と裁縫道具、ノート

うに、一人ひとりがテーブルに見本のまりをおいて作業に取り込む。二人の講師は聞きに来る学習者に丁寧に教える。なかには二つのまりを同時に作っている高齢者（A氏、77歳）もいる。一つは練習用で針を一針通して、その出来具合を見て二つ目の（本物）まりに針を通していった。去年からこの手芸教室に参加しているが、自分が満足できる作品が作れるまでは展示即売会に出さないことにしている。「（未完成「まり」を見せながら）もう少し頑張れば出来上がる。今年の展示即売会には自分の作品を自信持って出します」と語っていた。

## 5. 手芸活動をうながすミクロな「仕組み」

柳川のひな祭り行事やさげもん作り活動の背景にはそれらを地域振興の観光資源として活用するというマクロな「仕掛け」が見いだされた。しかし上で見たように実際に行事や手芸品の製作にかかわる地元女性の活動からは、お仕着せの行事遂行や義務的な手芸活動とは異なる参加の自発性や積極性あるいは制作活動における達成感や参加者間の親密な交流が見出される。女性たちのこの手芸活動への能動的参加を形づくっているのはマクロな外部条件だけではなく、新しい作品や手法への創造的挑戦、飾り付けの楽しさ、快美感覚、手わざを駆使する快感、他者の評価や金銭的対価などさげもん作りや展示の実践を支えるミクロで具体的な「仕組み（インセンティブ）」の存在も忘れてはならない。そこから見えてくるのは行政的仕掛けにもとづく他律的活動に終始しない、日常生活のなかに埋め込まれた人、モノや道具、あるいはコトとの関係性において生み出され、組織化される「実践共同体」の姿である。さらに言えばこうした女性たちの自発的で積極的な活動への参加あるいは学習という実践の集積こそが地域の伝統行事とそれに伴う伝統手芸知識の伝承過程を生み出しているのである。以下、女性たちの意欲的な手芸実践の場を構成する条件を参加のインセンティブ（意欲を引き出す仕組み）としていくつか抽出してみたい。

### (1) 展示と評価によるインセンティブ

自作のさげもんを外部の目に供することは、女性たちの製作活動における動因と密接に関連する。それは他者の眼差しによる作品評価に対する緊張感やそれ応じた達成感などを生みだし、製作活動の励みや継続性に結びつく。たとえば柳川市では年に一度、「さげもん展示即売会」が開かれる。地域の公共施設を借りきって大々的に開催されるさげもんの展示即売会は、1年間にわたり地域で作られてきたさまざまな作品の披露やあるいは金銭的評価を受ける機会となっている（写真7）。通常、本格的なさげもんには製作者の名前も付され、作り手の顔が見える展示会にもなっている（写真8）。同様の展示即売会はイベントの期間中、婦人会館や商店街でも行われている。

また行事活動としてひな人形やさげもんを自宅に飾り外部の人びとの鑑賞に供することも、広くさげもん作製活動の活性化につながる仕組みを担っている。初節句を迎えた家庭を訪問すると、当然のことながら飾り付けや細工物にそれぞれ個性や違い見られる。家庭ごとに趣向を凝らした飾りつけからは、訪問者の目を楽しませようとする女性たちの意欲や喜びが伝わる。初節句や女兒のい



写真 (7) 展示即売会



写真 (8) 製作者名と値段のついたさげもん

る家庭でひな人形やさげもんを飾ることはもちろんだが、注目すべきは、初節句の対象児のいない、あるいは年少の娘のいない家庭の主婦が、行事の期間中、自前のひな人形やさげもんをかざり、外部からの訪問者を積極的に家に迎え入れ鑑賞させる現象が生まれている。そこには女性たちの喜びや楽しみ、あるいは快美感覚にもとづく展示の実践がある。

### (2) 副収入というインセンティブ

さげもん作りへの積極的参加には経済的な契機も存在する。柳川ではげもん作りの土産品化や自作しない（できない）初節句家庭のための製作の外部化の現象にともないさげもんの市場（マーケット）が生まれた。婦人会やシルバー人材センターの手芸活動参加者のなかには、その技能を買われて受注による商品のさげもんを作る人も多い<sup>(13)</sup>。さげもんはひな人形に劣らず高価（左右一对で10万円前後のものも多い。）であり、高い技能を持つ女性の場合、1年に何対も製作しかなりの金額を手にする。しかし一般の女性参加たちは1年に1度開催される「さげもん展示即売会」が唯一おもな収入の機会となっている。自分の作ったさげもんや手芸品に値段が付き商品として金銭的な対価を得るといったローカルな市場システムも女性たちのさげもん作りへの参加を強く後押ししていると考えられる。

### (3) 工夫・創造のインセンティブ

趣味のさげもん作りは、その技術や細工物において自由で多様な展開を許容している。さげもんには飾り物や飾り方、その製作方法などにおいて伝統的な型も存在しているが、一般にはそれらをゆるやかになぞるような作品作りがなされている。こうしたさげもん知識・技術の重層性も柳川のさげもん作りの実践を構成するひとつの重要な仕組みと思われる。

初節句の家庭を訪れると昔ながらの伝統的な飾りを重視する家庭もあれば、現代的なアニメキャラクター、その年の干支人形などの手芸細工を好んで吊りさげる家庭もありさまざまである。伝統

の型や手法に厳しく縛られず自由な趣味活動として実践されるさげもん作りからは、各人の趣向にそった新しいモチーフや作品が生み出される。彼女たちは日々の手芸実践のなかで個人の創意工夫を自由に発揮しながらさまざまな趣向や新作を生みだしている。女性たちの日常的な創作活動におけるこうしたささやかな挑戦の積み重ねは、従来のさげもんの伝統的形態に新しい要素を付け加える契機ともなっており、同時に女性たちにとってさげもん作りの楽しみや意欲を生みだす源泉となっているといえる。

一方で地域には作者の高い技術と美的センスが認められた結果、作家名をともって「作品化」するさげもんや「民芸作家」も存在しており、それはさげもん作りの専門職化や職人化をあらわしている。さらに伝統的な型を忠実に守り続ける作り手たちも存在しており、地域社会におけるさげもん作りの知識・技術の多層的構成が見出される。

#### (4) ボランティア活動におけるインセンティブ：昭大第二小学校のクラブ活動<sup>(14)</sup>

婦人会は活動の一環として小学校を対象に柳川「まり」作りの体験学習のための講師の派遣をしており、そこでのボランティア活動においても実践を組織化するミクロな仕組み（やりがい）を見出すことができる。主な指導は最高齢の女性会員（75）Fさんがしており、他の二人の会員とともに針の通し方、糸の色の選びなど基本的な作業の指導をしている。

訪問の当日は年度の最後のクラブ活動で、発表会に向けての作品作りの仕上げに取り込んでいた。子どもたちが発表会で展示するそれぞれのまりを作り上げるため、一針一針製作していた。当日完成させること目標にしていたが、なかに間に合わない子どもがいた。そこで講師のFさんは自分で持って帰って完成させることにした。子どもでなくFさんが持ち帰る理由を尋ねると「子どもたちが自宅に持って帰っても手伝ってくれる人がいないため、このままでは未完成のまま終わってしまう。これまでの子どもたちの努力を無駄にしたくないし、あと少し手を入れれば完成できる。発表会の日、自分たちの作品を見た子どもたちも喜ぶし、見に来てくれた家族や地域の方々も喜ぶよ」と嬉しそうに語っていた。

教室のボランティアの女性たちからは小学生への指導や活動を通じて得られる楽しみや喜びが語られた。Fさんはその技術をかわれて初節句の「まり」やさげもんの製作を数多く依頼されている。そんな忙しいなかを小学校に指導に来ている。しかし、Fさんをふくめ指導に当たっていた女性会員からは「自分がこのように学校で子どもたちに教えるとは思ってもいなかった。」「手芸をして誰かの役に立てること本当に嬉しく思っている。」「子どもたちが作品作りに行き詰ったとき「先生、先生、」と呼んでくれるのがとてもうれしい。」「子どもたちが自分の作品を一所懸命に作り、完成させたときの喜ぶ顔を見るのが楽しみだ。」などと学校で子どもたちに手芸を教えることの喜びとやりがいが語られていた。

以上のように、柳川の女性たちの能動的な手芸活動を構成するものとして、観光開発のようなマクロな外部条件だけではなく、他者の眼差しと飾り付けとの相互作用、新しい作品や手法への挑戦の意欲や機会、学校ボランティアとしてのやりがいなど、地域に埋め込まれた資源や実践の場に組



み込まれたミクロな「仕組み」を見逃すことはできない。

## おわりに

柳川のひな祭り行事とさげもん細工は互いに密接な関係を維持しつつ今日に受け継がれている。一方で行事をとりまく観光化の動向や人びとの生活様式の変化などによってその関係もさまざまに組み替えられており、両者の新しい関係を生み出している結節点として地元の女性たちの手芸活動（さげもん製作）の場や実践があった。柳川の女性たちは祝いのためだけでなく、さまざまな目的や動機にもとづいて手芸活動に取り組んでいた。こうした女性の活発な手芸活動の背景として地域を挙げての観光の「仕掛け」があることも事実である。しかし女性の手芸活動を促しているのはそうしたマクロな外部条件だけではなく、製作活動への積極的な参加を導くよりミクロで具体的な「仕組み（インセンティブ）」にも着目する必要があると思われる。実際、ひな祭り行事やさげもんを中心とする手芸活動には、お仕着せの行事遂行や義務的な手芸活動とは異なる自発的で能動的な参加の様子が見出される。そこに浮かび上がるのは観光の仕掛けによる単なる他律的活動ではない、柳川の女性たちの生活のなかに埋め込まれた人、モノや道具、コトとの関係性のなかで精妙に組織化されていくいわゆる「実践共同体」の姿である。そして女性たちのこうした実践の集積こそが地域の伝統行事とそれに伴う伝統手芸の伝承過程をうごかしていると考えられるのである。

## 註

- (1) 本論文は坂元とグリジャナティが共同で進めてきた現地調査にもとづいている。調査データは共有され、小論執筆にあたってはグリジャナティが主としてさげもん展示や製作場面に関する部分を執筆し、全体構成や考察部分などを坂元が担当した。また本文には坂元（2009）と一部重複する内容が含まれている。
- (2) ここで取り上げる柳川の民俗行事の新しい展開プロセスに関する報告の下地となっている理論枠組みは、近年の関係論的、動態的伝承論によっている。すなわち柳川におけるひな祭り行事の観光資源としての展開、それと不可分に関係する伝統手芸活動・知識の再構築の現象は、例えば「変化しつつ構造化する動態としての伝承」（小林257）や「伝承をモノ・コトという媒体を中心に置いた関係全体が再生産されていく過程」（同257）という小林らの動態的伝承認識の延長上に位置づけることができる。
- (3) 田辺（2002, 2010）はレイヴ/ウェンガーの「実践共同体」論が日常実践の社会人類学研究において有効な視点を持つことを認めつつも、そこに内包されたアイデンティティ化の画一性および権力関係の視点の欠落を問題視している。今回、予備的報告という本論考の位置づけもあり、これらの指摘を十分受けとめた検討にまで到っていない。
- (4) 縮緬の着物の端切れを用いて作られた「お細工物」は、袋物（香、琴爪などの入れ物）、玩



具、御守り、女性のアクセサリとして江戸期の富裕な武家や商家の女性の間で作られはじめた。明治から大正時代にかけては家庭以外でも女学生のための家政教育の教材としても用いられた。着物の古着や端切れを再生利用するお細工物づくりにおいては、当時の女性の儉約精神や裁縫の技術、あるいは女性的美意識を身につけるための教材としての役割が期待されていた(井上 2004, 2008 尾崎 2008)。

- (5) さげもんと歴史的関連の深いちりめん細工にも子どもの招福や魔除け、御守りや迷子札などや産育にかかわる品々が数多く見出せる(尾崎 2008)。
- (6) 2010年3月12日, 25日訪問
- (7) 上の例に見られるように柳川では観光用と個人用のひな祭りが同時に進行している。日本の伝統習俗であるひな祭りを地域の観光資源として活用する取り組みをひとまず「観光ひなまつり」と呼んでおきたい。そこには私的行事としての各家庭のひな祭り(「生活ひな祭り」と地域イベント化した「観光ひな祭り」とが重層化したプロセスとして進行している。
- (8) 2010年2月9日, 3月12日, 25日訪問
- (9) 九州圏内での観光ひなまつりのネットワーク化の取り組みは、まず九州各地の行事を一冊のガイドブック等にまとめて取り上げることをとおして、地域間の比較にもとづくひな祭りの地域ごとの固有性や魅力を一層きわだたせている。またガイドブックやウェブサイトをとおして各地の行事の多様性と関係性を具体的、視覚的に示すことで、観光客自身が体験的に行事間の比較を楽しめるよう企画を準備し、結果的に各地域や九州全域の相乗的な観光効果を生み出すよう考えられている(九州ひなまつり広域振興協議会 2009)。
- (10) 平成21年には2回目のサミットが柳川市で開催された。今回のサミットの「共同宣言」では、全国でも珍しい「つるし飾り」の伝統をもつ三つの地域が相互に連携を深めこれを貴重な観光資源として活用することをとおして地域振興のために協力していくことが確認された
- (11) 2010年5月24日訪問
- (12) 2010年7月13日訪問
- (13) またさげもんは商品化という契機によって「小生産物」の側面を持つといえる(小川 2007)。彼によればこの「小生産物」は大規模生産物ではないがある程度「大量」に作られ、地域限定を売り物に手業・手技を必須の工程とし、商品としての使用価値・交換価値を持つ(同書: 13 - 14)。現代のさげもんもこのようなローカル資源として生活の中から切り出された「小生産物」にほぼ重なる性格を持っている。
- (14) 昭大第二小学校は柳川市西部に位置し、筑後川と沖端川下流に挟まれた干拓地に広がっている。「郷土に誇りをもち、思いやりの心と考える力をもった子どもを育成する」ことを学校の教育目標に立てている。現在(2009年)在籍児童数は220人である。柳川まりのクラブには9人の子どもが入っており、そのうち一人は男子、残り8人は女子である。2010年2月10日クラブ活動訪問。2月24日クラブ活動発表会訪問。

### 参考文献

- 小林康正 1995 「伝承の解剖学 ― その二重性をめぐって ―」 『身体の構築学』 福島正人編著 ひつじ書房
- 九州ひなまつり広域振興協議会 2009 『ひなの国九州 ― 絢爛豪華な春が来る ―』 (リーフレット)
- 井上重義 2008 「ちりめん細工の復興について」 『ちりめん細工・春の寿ぎ展』 (北九州市立小倉城庭園 講演会配布資料：2008.12.13)
- 2004 「ちりめん細工の復興活動」 『日本玩具博物館開館30周年記念誌』 pp.18-21. 日本玩具博物館
- 岩本通弥 (編) 2007 『ふるさと資源化と民俗学』 吉川弘文館
- 川森博司 2001 「現代日本における観光と地域社会 ― ふるさと観光の担い手たち ―」 『民族学研究』 66 (1) : 68-84
- レイヴ, J./E. ウェンガー 1993 『状況に埋め込まれた学習』 佐伯胖訳, 産業図書
- 小川 了 2007 「序 ― 躍動する小生産物」 『資源人類学04』 pp.13-21 弘文堂
- 大藤ゆき 1999 「ヨモザイ ― 三月節句のククリザル ―」 『子育ての民俗』 pp.229-239. 岩田書院
- 尾崎織女 2008 「ちりめん細工とその文化」 北 『ちりめん細工・春の寿ぎ展』 (九州市立小倉城庭園 講演会配布資料：2008.12.13)
- 坂元一光 2009 「子どもの民俗行事と地域の活性 ― 柳川の観光ひな祭りと女性の「さげもん」細工 ―」 国際教育文化研究, 第8号, pp.39-49
- 田辺繁治 / 松田素二 2002 『日常実践のエスノグラフィー』 世界思想社
- 田辺繁治 2010 『「生」の人類学』 岩波書店

## The Reconstruction of Hina Dolls Festival Events and Women's Handcrafts Activities

Ikko SAKAMOTO  
Guljennet ANAYTULLA

This article reports on the situation where the traditional girls' festival in Yanagawa has been reconstructed as a "tourism girls' festival" by the administrative tourism promotion policies and consequently is contributing to the transmission of the women's traditional handcrafts art and organizing their 'community of practice' by J. Lave and E. Wenger sheds light on the processes of gradual participation that enable the participants to acquire knowledge and skill, together with their identity of being member of the community. In this paper we intend to introduce instances of Sagemon decoration of households during first Seasonal festival, Sagemon-making sessions and workshops at women's clubs, work centers for the elder, as well as to describe in overall terms the actual circumstances of events and handcrafts practice of local women who support and activate the transmission process of traditional events and handcrafts art.

In recent years, the administrative approach to invite tourists and create related industries through the use of regional folk culture and traditional events in tourism, as a part of their regional promotion policies, has become a national phenomenon. One example of such an approach is the tourism business of *Girls' Festival on March 3* — a traditional girls' first seasonal festival held throughout Kyushu with the advent of the spring tourism season. Yanagawa City of Fukuoka Prefecture (in the Kyushu district) also participates in this festival; however, it has a unique feature of hanging numerous small, beautiful handcrafts called *Sagemon* made from silk crepe (small-sized handmade stuffed figures, depicting animals and plants) on both the sides of the traditional girls' festival dolls. *Sagemons*, decorated along with the girls' festival dolls, are time-honored craft tradition carried on in the local community, handcrafted by mothers and grandmothers of girls who are of the age to celebrate their first seasonal festival, wishing them happiness and sound growth.

Today, the family celebration of Yanagawa has opened up to a wider region and to tourists through the use of the Yanagawa girls' festival and the *Sagemons* displayed in that festival which have both been passed on as a local life ritual. Moreover, this change has resulted in an increased interest and demand for the *Sagemons* made by the local women.